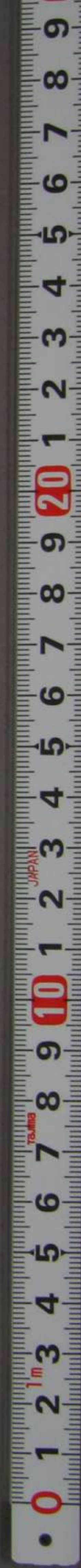
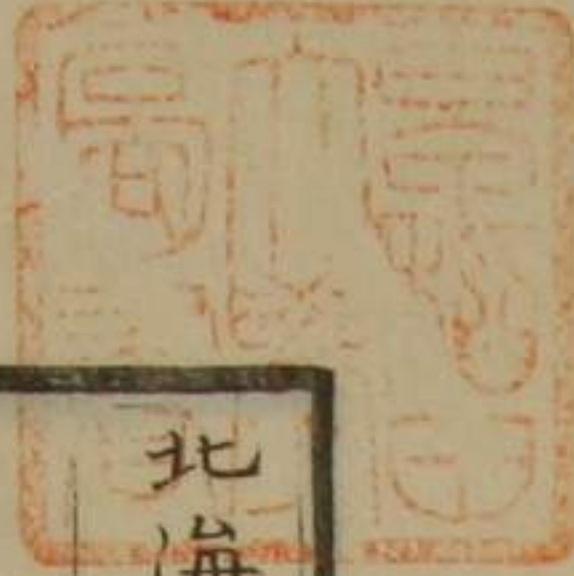


北海道開進會社第零年報



114
A1074
1



北海道開進會社第一回年報目次

創業ノ大意

會所設立ノ順次

新墾着手ノ順次

殖民ノ方法

士族少年生徒ヲ募集スルノ大意

各會所地誌攬要

各會所一覽表

十三年度収獲表

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

創業ノ大意

農ハ産ノ基産ハ即チ農ヨリ起ル蓋シ國家經濟ノ道實ニ根據ニ抑
我開進會社設立ノ趣旨タルヲ救テ汲カ鎔銖ノ利ヲ争フヲ以テ事ト
為サズ只國家久安ノ根柢ヲ鞏固ナラシメント欲スルノミ邊テ我國ノ近状
ヲ觀察スルニ財政ノ困難日一日ヨリ甚シク天下ノ大勢識ニ憂フマ
者アリ此切ニ其弊源ヲ討ヌルニ我國殖産ノ道未タ興ラス而シテ輸
出入ノ額常ニ其平均ヲ失スニ職ラシテ之レ由ルニ夫レ物産生殖ノ
興廢ハ一國貧富強弱關スル大ナリ豈我國民タル者カヲ生産ノ業ニ
竭ケルニシテ哉今泰西各國ヨリ輸入スル處ノ物品ニ就テ之ヲ言ヒカ坐床
器衣食ノ具大抵陸産ニ成ラザル者ナシ之ヲ見ルニ亦以テ開拓事業ノ今

日ニ一大急務タルヲ知ルニ足リ嗚呼我國農務ノ怠ニスヘカクナルヲ業ニ既ニ斯
如シ苟モ國家ニ志アル者誠ニ遲々スヘキ秋ニアラザルナリ我開進會社ト長若
攝輜輔大ニ此ニ見ルアリ明治十二年四月奮テ北地ニ航シ曠漠タル沃野ノ
空レク不毛ニ委スルヲ目撃シ浩歎措カス思ヘラク該道開墾ノ事業ニメ
大成スルヲ得ハ我國實ニ貪テラコト欲スト由比得ヘカラスト是ニ於テ始メ
テ北海道開進會社ヲ創立セテヲ開拓便函館支廳・上願ス六月石
川縣士族長尾勲信林頭三金澤ヨリ來ル乃チ告ルニ其意ヲ以テスニ士風
ニ此地ヲ開墾シテ大ニ我國ノ農業ヲ振起セント欲スル志アリ依テ大ニ此
舉ヲ贊成シ共ニカラ尽セテヲ約ス同月輜輔社則申合條俵壹萬
枚ヲ列シ各地有志者ニ配付ス其概目ニ曰ク北海道ノ地タルマ沃土萬里漠ト

レテ其際涯ヲ極ヘカラス而メ今其耕民ニ乏シキハ天下ノ人能ク契知ズル
所ナリ故ニ開拓便ニ於テハ非常ノ英斷ヲ以テ上等耕地壹千歩ノ代
價金壹圓五拾錢ヲ以テ永世賣與セラレ之レニ加フルニ器械牛馬ヲ付
シテ其有トナル原野ヲ起サシメ其意ヲ用テ密ナルト今既ニ如
而メ各府縣ノ士民該道ニ赴ク者多キヲ加ヘサレ所以ノ者蓋シ因循姑
息ノ流弊ト謂ハサレ可ケマ今ヤ外國ノ益立シテ對等ノ國權ヲ更張シ
富強ノ大策ヲ講究スルノ時ニ方リ豈姑息因循ヲ事トスヘキヤ因テ茲ニ
一大會社ヲ設立シ北海道開進會社ト稱シ以テ天下ノ同志ト協合シ大
ニ全道ノ農務ヲ興起セント欲スルナリ則チ其方法ヲ列叙スルヲ四十
五條而メ其就業年限ヲ十五年間ト爲シ資本金ニ百萬圓ヲ募

集以テ之ヲ貳万株ニ分チ一株金百円トナス則チ該金額ニ利信ノ方途
ヲ設ケ其利子ヲ折半シテ年々之ヲ株主ニ配合シ他ノ半額ヲ以テ開墾費ニ充
テ十五年後ニ至テ墾成地積拾万町歩ヲ得テ之ヲ全株主ニ配当スル者ト
ス即チ一株ニ付テ五町歩ノ地券ヲ有スル方則チ其細目ニ至テハ別ニ我社
申合條件ニ就テ之ヲ視シテ要ス七月青森縣士族木村靄吉靄弘
前藩士百余名ト共ニ來リテ我社ニ加入セシテ請フ即チ許諾ス己ニ
テ靄吉靄ヲ以テ致ス石川縣士族吉田温一郎等モ亦來テ我社ニ投セリヨリテ
輟輔弟岩橋自助和歌山縣堰端純太郎等ヲ率ヒテ阪府ヨリ來ル是
ヨリ先キ自助曾テ開進會社申合條件ニ就テ屢ク推問ス所アリ此ニ至
テ益々其方途ノ確實ナルヲ覺リ來リテカラ社業ニ尽セヨリテ約ス八月

二十一日北海道開進會社創立ノ允許アリ則チ全道十一ヶ國ニ於テ荒蕪地
積拾万町歩無代價下附ノ允許アリテ之ヲ十三一年一月十九日ニ至テ悉ク特
許ノ恩命ヲ得タリ爰ニ於テカ我社ノ基礎愈々確ク其業ヲ實施スルノ議不
定ムル高知縣士族宮崎簡亮亦此地ノ開拓ニ宿志アリ曩者開拓便
御用係トナリテ札幌ニ在リ曾テ我社ノ事業ヲ美譽セシ偶々病ニ臥
シ出仕セサル者數聞月竟ニ病ヲ以テ職ヲ辭ス其後數月ニテ病愈ヒ此
ニ於テ始メテ我社ニ投シ専ラカラ社業ニ尽セリ

會所設立ノ順次

我社創設ノ初首トシテ議レテ曰ク今マ我國農事ノ大ニ振興セザル所以ノ
 モノ果メ何ニ由テ然ルカ豈古來習慣ノ然ラシムル所機械ノ功用牛馬ノ利
 便ヲ覺知セス徒ラニ入クヲ勞費スル弊未タ全ク脱セザルニ是レ由ルト
 仍テ我社荒涼ヲ開キ耕耘ヲ施スニ當テハ近時專ラ泰西諸國ニ行ハル所
 ノ農業機械ヲ操リテ之ヲ折衷利用シ且ウ人クニ換ユルニ牛馬ヲ以テス其
 徒勞徒費ヲ省ク亦少小ト是レ實ニ我社ノ着眼スル所ノ一大要點
 ナリ明治十二年十月本道ヨリ渡嶋國龜田郡寺野地方ニ於テ荒蕪地
 積貳拾三万七千六百八坪ヲ拜借シ家屋六棟ヲ建設シ耕牛貳拾九頭耕馬拾
 四頭新墾犁拾五組耙四組ヲ備ヘ社員及ニ教授九名ヲシテ生徒墾夫四拾余名

ニ牛馬機械ノ使用法ヲ訓練セシム又別ニ七重勸業試験場ヨリ卒業生三
名并ニ牛馬若干頭ヲ拜借シ兩相雪ヲ犯堅氷ヲ踏シテ頻リ之ヲ演習セシ
ム十二月三十一日ニ至ルノ間殆ト虚日ナシ而レテ開墾スル所ノ地積貳拾一万
貳千四百拾八坪ヲ得タリ此ニ至テ人畜漸ク其事業ニ習レ器械ノ使用亦大
ニ利益アルヲ覺セリ是レ實ニ社開墾嚆矢トス是ヨリ生キ渡嶋國南志郡乙
部村領宇千代野隣極國山越郡長万部村領宇紋別等ノ數ヶ所ニ於テ荒
蕪地拜借ノ義ヲ上願セリ十三年三月四日部長万部ノ地所拾万町步無代
價下附ノ内割下ノ允許アリ其地積ノ如キハ我社第一報告一覽表甲類ニ
讓ル以下之ニ依テ尋テ寺野拜借地モ亦同ク割下ノ允許アリ此ニ於テ我社
第一會所ヲ寺野ニ第二會所ヲ乙部ニ第三會所ヲ長万部ニ設置ス而シテ

諸種ノ耕作ヲ實施シテ穀菜ノ成育收穫ノ多少ヲ試ムルノ當年度ニ於テ
最モ要務タルヲ以テ此三會所ノ社耕ヲ施シ其耕耘ヲ試ム且リ各其播種
地ヲ分テニトナシ甲ヲ試驗耕作トナシ乙ヲ雜種耕作ト為ス蓋シ試驗耕
作ナル者ハ耕耘普通ノ順序ヲ經テ之ヲ施行シ雜種耕作ナル者ハ新墾地
ニ於テ其順序ヲ經ス僅ニ二回ノ耙耨ヲ施シテ之ニ下種シタモノ即チ從
テ新墾ニ從テ下種ス故ニ甲ニ比シハ大ニ其勞費ヲ省ク所アリトモ其
收穫ニ至テハ又減少セリ蓋シ其試驗耕作ナルモノハ當年度ニ於テ我社
最要トスル所ナリ八月後志國岩内郡岩内地方ニ於テ開墾着手ノ允准
ヲ得テ第四會所ヲ設置ス會所牛馬舎板藏等ノ家屋ヲ建設シテ新墾
ニ着手ス十四年一月ニ至リ昨年試耕スル所ノ收穫ヲ精算スルニ三會所

平均一反歩八田四拾七錢九厘ノ價額ヲ得テ初年ノ此額ヲ得ル不以テ農
業ノ後來確實ナルヲ保スニ足リ十四年六月七日渡嶋國庵田郡軍川村領ニ
於テ地所割渡下附ノ允許アリ即チ第一會所第一出張所ヲ設置シ既ニ
新墾地積四町九段余歩ヲ得テ六月廿四日石狩國札幌郡千稻村領
石狩國石狩郡花畔村領ニ於テ地所割渡下附ノ裁ヲ上願シ更ニ第五會
所ヲ此地ニ設ケトス其四ニ我々社資金ヲ費スニ至テハ三年ノ經歷實檢上ニ由テ
現今大ニ節畧スルヲ得テ既往ヲ回顧スルハ初年二年ノ間人畜未タ訓
練セズ牛馬ヲ使用シ機械ヲ運轉スルニ當テハ迂遠ノ事業ヲ為スナキ能
ハス且ツ牛馬機械ヲ購入スル咸ナ良ヲ得タルモノニフラス或ハ無人ノ地ヲ開
クニ際シ土地ノ便運搬ノ利其得失ヲ未然ニ推測スル能ハルモノアリ是

レヲ今日ニ比較スルハ又言ハニ事業ニ慣レ後今ハ四石ヲ以テ機械ヲ使用スル
ノ其半ヲ以テ足レリトシ機械ヲ購ヒ牛馬ヲ撰ム其得失自然ニ知得スル
者アリ新地ヲ開クニ際シ土地ノ便運搬ノ利其簡易ニ涉ルヲ得ん昔日ノ如キ
ナラス故ニ費用ノ減省セン日一日ヨリ多クヲ加フルモノト爲シ之レ偶然ナラス
ニ實檢ノ如クニ由ル處俚諺ニ云フ習フヨリ慣レヨリ農家ニ於テ最モ貴
重ノ格言ナリ

新墾着手ノ順次

明治十四年我社新墾組ト稱スル今割請員組ナル者ヲ置キ千葉縣
舊牧羊場卒業生徒玉井駿吉ヲメ我社拾万町歩新墾ノ犁耕ヲ負
擔セシム是レヨリ先キ十三年十月輒輔計算要領ヲ編制シ以テ後來
ノ目標ヲ定ム其畧ニ曰ク我社就業十五年ニテ拾万町歩ノ耕地ヲ成
熟ナラシメレテ期セリ今之レヲ一々年賦ニ平均スレバ則六十六百六拾六
町六畝六ト爲ル然レモ開墾ノ事業ヲ實施スルニ當テハ初度三四年
間ニテ一時カヲ尽セトスル極メテ難シ蓋シ人畜未ク訓練セズ且ツ
能ク地形ノ如何ヲ辨知セラル以テ當ニ資金ヲ往費スルコトヲス終ニ之カ
爲メニ中廢スルノ恐ナキヲ免レス故ニ我社十五年間ノ事業ヲ三分シテ初中

後ノ三期トス即チ初期五年間ハ三千町歩中期五年間ハ三万七千町歩後
期五年間ハ六万町歩ヲ釐成セトスルニテ又新墾費一町歩金拾五円ノ賦ヲ
以テ豫算ヲ五テ別ニ耕牛馬家屋ノ保存年限ヲ定ム但シ耕馬ハ滿四年耕牛
ハ滿五年家屋ハ滿拾年機械ハ滿五年小農具ハ滿三年ニノ皆一旦
廢棄スルモノトス依テ其元價ヲ該年限ニ割附シ毎年消費スル處ノ
新墾費額ヨリ各種ノ保存料ヲ扣除シ剩ス處ノ金額ヲ以テ墾夫ノ
食料貸金ト耕牛馬ノ飼料其他ノ費用ニ充テルノ豫算トス之ニ由テ
一度其年限ヲ過シ復タ更ニ之ヲ新調スルノ方途ナリ夫ノ社耕ノ如キ
至テハ壹段歩耕作費額金六円トナシ而シ今此ニ陳述スル處モハ特
其概月ヲ表スルニ過キカニ而已蓋シ該計算要領ニ我社出納計算ニ

係ル處ノ内則ニテ前途ノ目標多ク之ニ因據ス今夫ノ新墾組ノ設置スルカ如
ク亦此計算要領ニ據テ其方途ヲ制定セリ則チ該組ト申合約定ノ略ニ曰
ク我社新墾ノ事業ハ新墾組ヲシテ悉皆之ヲ負擔セシム可シ依テ費金一
町歩金拾五円ノ割合ヲ以テ其間墾セシ町段ニ應シ月々之ヲ配附シ該
金額ノ外ハ更ニ之ヲ給與セズ其損益ニ至テハ敢テ本社ノ関セザル所トナ
ス其編制方ノ如キハ組長一名組頭四名墾夫數十名(一等ヨリ)ヲ置
キ我社所轄地ニ於テ其着手セシトスル地ニ出張シ威テ指揮ヲ待テ單ニ新墾ノ
事ニ従事セシム耕牛機械農具家屋等ノ如キハ悉皆計算要領ニ據テ之ヲ
貸付ス乃チ本年後ハ唯六百町歩ヲ新墾スルノ約定ヲ結リ組頭長玉丹殿
吉資性豪邁百折屈セズ能ク組合者ヲ督励ス將ニ大ニ爲ヌ所アラトセシニ惜

哉無虞ノ病ニ罹リ終ニ歿ス同志吉村南摩等ノ數名亦能ク其志ヲ
継キ専ラカラ新墾ノ事業ニ尽セリ

植民ノ方法

我社創業ノ初ニ當リ株主ヲ區別シテ自耕者不自耕者ノ二類トス其自耕者
ハ即チ株主トナリテ此地ニ來リ耒耜ヲ操リテ自ラ耕耘ニ従事スル者ヲ云フ
不自耕者ハ即チ其身外ニ在テ自ラ耕耘ニ従事セザル者ヲ云フ然レモ
若シ不自耕者ニシテ其代耕者ヲ出レリ欲スル者ハ本社ノ許諾ヲ得テ
之ヲ爲ス亦敢テ妨ケナシ即チ之ヲ一類代耕者ト云フ其渡航旅費及ヒ
開墾費ハ共ニ悉皆自辦タリ只家屋ノ之ヲ貸附ス但シ第一第二
兩年間更ニ其損耗料ヲ要セス第三年度ニ至テ始テ建築費額百分
ノ十五ヲ納シム而シテ其收穫ノ如キハ固ヨリ各自ノ所得ナリ又熟成ノ
田地ヲ得ルカ爲メ不自耕者ノ爲メ耕夫ヲ雇フ之ヲ二類代耕者ト云

其方法ノ如キハ則チ數月或ハ數年ヲ約シ其労カニ應シテ之レカ等級ヲ分テ各々日給若干錢ヲ取ラレム是レ當初編制スル所ノ我社植民方法ナリ然レニ之ヲ實施スルニ當テ移民ノ種類數等シテ往々不便ナリ能ハス蓋シ夫ノ自耕者ト云ヒ不自耕者ト云ヒ皆遠ク墳墓ノ地ヲ去リ各々數口家族ヲ携帶シ來リテ北海寒烈ノ地ニカ耕スルニ當リ尚一層ノ保護ヲ加ヘ厚ク助成ヲ施サトスルノ議ヲ決定セリ依テ明治十四年四月更ニ該方法ヲ改正シ總テ之ヲ我社借地人ト稱シ新墾地積ヲ十五年間貸附スルノ方法ヲ定ム則チ其期滿ルニ及テ又更ニ永世貸附ノ方法ヲ議定スレト且ツ其耕作法ニ專ラ牛馬ヲ使用シ泰西農業機械ニ據テ耕耘ノ便ヲ計ラレム是レ其カラ用フル小ニシテ其功ヲ治ル誠ニ大ニナリ又借地人拾戶ヲ

一組ト爲シ其組合中ヨリ組頭一人差添一人ヲ擧テ農事上萬端ノ責任ヲ負荷セシム地所貸附ノ法ハ大約一戸三町歩ヲ以テ制限トナストモ氏其餘カアハ者ニ至テハ此限ニテラス家屋炊具履具機械農具耕馬肥料及ヒ米塩噌等必需ノ物ハ悉皆自費タラレトモ氏當初之ヲ自辦スル能ハサルモノハ本社ニ於テ之ヲ賣與シ年々收穫價額ノ内ヲ以テ漸次之レヲ完納セシム又借地人ヨリ本社ニ納付スル處ノ地代金ハ收穫品十分ノ二ト爲シ地租官納スル日ニ至テハ更ニ其地租ノ半額ヲ支出セシムトス尚其細目ヲ詳ニセシト欲セハ宜ク我社貸地條件ニ就テ之レヲ視ルヘシ已ニシテ明治十四年四月廣嶋福岡徳島高知和歌山石川等ノ諸縣ヨリ借地人ヲ募集シテ我第ニ部 第三 長万部 第四 岩内ノ三

會所へ移住せしむルモノ七十三戸人負貳百三拾九人ナリ皆本年度ノ農
期ヲ誤ラス相勵ニテ耕耘ニ従事ス現今各會所ノ移民ノ景況ヲ記テ之ヲ概
言スルハ全ク一村落ヲ爲セリト云フシ且ツ夫レ家族携帶者ハ断然
決意墳墓ヲ築ク勢アリト雖モ單身者ニ至テハ當初心意定マラス時
ニ漢場ニ趨ラント欲スルノ状態ナキアラス其會所ノ主任タル者カラ極テ
鼓舞奨励ニ手自ラ播種ノ業ヲ助ク斯ノ如クハ各々幾多ノ田自田ニ耕
作ヲ施セシヨリ漸ク其地ノ懇熟シ至ルヲ望ミ其蔬菜生育ノ期ヲ俟
自然其堵ニ安スル者ノ如シ或ハ村社ヲ建テ學場ヲ設ケ墓地ヲ定メ
及ヒ結婚以テ安着ノ状ヲ示ス或ハ死スルアリ生スルアリ知ラス識ラス
農家ノ体裁ヲ全フスルニ至ル殊ニ本年度播種物ノ如キハ咸ク能ク其期

節ニ合ヒ逐次順ヲ追テ生育セリ今后天災ナキニ於テハ必ス適當ノ収
穫ヲ得シ我社ノ幸福亦之レ過ルナシ又徳島縣ヨリ借地人六十名廣
嶋縣ヨリ同貳百五十五名既ニ移住ノ約ヲ了シ去日官船ヲ以テ各會所
ニ移植セシメタリ特リ第一會所ハ一段歩金六円ノ耕作費ヲ以テ社耕ヲ爲
サシム即チ該地積百一町歩余ヲ四區ニ別テ每一區擔當者一人ヲ置キ
耕夫五十名ヲ限リトシ外ニ日雇男女七十エヲ雇入シテ採草ヲ專ニセシム
初第一會所ノ地質ヲ相スル者皆以テ瘠土ト爲ス其耒耜ヲ採テ自ラ
耕耘ヲ專トスル者亦以テ然リト爲ス而シテ昨年大ニ勞費ラ此地ニ施シタル
ヲ以テ歎今日ニ至リテハ蔬菜ノ生育殆ト他ニ譲ラザル者ノ如シ嗚呼勞力
怠ラザルニ於テハ瘠土モ変シテ沃土トナル豈亦思ハザルヤ四月亀田

郡軍川村領ノ地方ヲ開墾ス之ヲ第一會所第一出張所トス既ニ水稻菽
麥芋等ノ類ヲ試作セリ現ニ借地人ニ戸ヲ移ス此地全開ノ後ハ百戸ヲ植
ルニ足ル五月札幌地方手稻村ヨリ花畔ニ至ルノ間ニ於テ地所下附ノ義ヲ
上顧シ現ニ手ヲ開墾ニ下セリ之ヲ第五會所ト爲シ更ニ大ニ植民ヲ謀ル
ノ豫圖ナリ

士族少年生徒ヲ募集スルノ大意

明治十四年七月社長岩橋轍輔大ニ時事ヲ憤慨シ天下ノ士族衆少年ヲ
北海道ニ移シ專ラ現象農事ヲ研究セシメ竟ニ永世就産方途ヲ授ケト
欲シ其方案ヲ稿定シテ之ヲ貴紳諸公及ヒ各府縣長官ニ稟申ス其畧ニ
曰ク方今天下ノ士族金祿公債ノ恩賜ハ大抵之ヲ賣却シ了リ隨テ生計
出途ノ方ヲ失ヒ一日ヨリモ貧窶ニ迫ラサルモノナシ近時ニ至テ其慘情益
々甚キヲ露ハス亦誠ニ惻察ニ堪ヘズ而シテ或ハ云フ其人ノ氣力ニ乏レク又村
藝ヲ有セサルノ輩收テ自ら取ル禍ノト蓋シ其氣力ニ乏レキカ如キ其
輩未タ之レナシトセズ其材藝ニ長セト云フニ至テハ未タ必スレモ然リト爲
スヲ得ス何トシハ則幼ニシテ學ヒ長シテ行ハルトスルモノ皆悉ク無用ニ屬シ

今日生計ノ要務ハ曾テ賤業視シテ大ニ厭フ處タリ豈其人材藝ナキヲ以テ之ヲ誣ユヘケヤ况ヤ眼ヲ轉シテ維新ノ當時ヲ見ヨ

聖天子上ニ在マシ賢縉紳側ニ在リ以テ能ク明治ノ偉業ヲ立ルト虫モ抑亦天下ノ諸侯與テカアリ諸侯ノカハ安ソ今日士族ノカニ非ンナキヲ知ヤ今日士族ノ窮迫スルニ當テ之ヲ自ラ取ルノ禍トシ故ハスシテ可ナル者トナスカ是レ轍輔等ノ大ニ慨歎スル所ニ輒々此議ヲ起ス所以ナリ然リト亀氏之ヲ既往突驗ニ徴スルニ其丁年ニ過ル者ハ舊慣未タ全ク脱セス所謂幼ニシテ學フ者ハ其事專ラニシテ雜ナラス長シテ學フ者ハ心意他ニ馳セ大抵中止セサルモノ勤シ因テ今天下ノ士族少年ヲノ北海道ニ移シ農事ニ服從セメ竟ニ一永年ノ生計ヲ當コシテトヲ謀リ然ルニ其經費固ヨリ細額ニアラス少ク

シテ年拾万圓ヲ要スレ爲メニ姑ラク之ヲ筐中ニ藏メテ發セス然レモ孰カ天下士族ノ景況ヲ考フルニ今日尙シ措テ救ハス窮迫漸ク加ルハ終ニ恒心放擲シ誤テ奸雄ノ資トナル不知レカラス過慮一トクニ及ブトニ未ク寒心セズハアラヌ是レ此稿ヲ草シテ全ク廢棄スル能ハル所以ナリ而シテ今マ渡航入學ヲ志ス者陸續相踵リ各縣廳ノ照會漸ク多クテ此ニ於テ予轍輔衷情終ニ決ス其經費支辨ノ方途ニ至テハ將サニ同志者ノ賛成ヲ得テ確定スル所アリトス依テ今年試ニ二百名未滿ノ少年生徒ヲ移シテ其端緒ヲ開クト欲シ我第一會所ハ陸軍射的場并借地拾万歩余ヲ以テ現業試檢場トナス耕牛拾頭耕馬五頭新墾犁再墾犁耙耨收穫器等ノ春西農業機械其他農具類數種及ヒ農字書數十種家屋宿具炊具ノ準備既ニ整頓セリ尙其

方則ノ如キハ士族少年現業生徒取立規則ニ詳悉ナルヲ以テ此ニ略ス

北海道開進會社第一會所第一年報

地誌概要

地方

吾開進會社第一會所ハ渡嶋國龜田郡下湯川村近郷寺野ニ在リ北緯四十一度四十九分五秒東經零度四十二分三十二秒ニ位ス地函館港ヲ距ルニ里ニシテ近ク其間深堀一本木諸小村アリ會所ノ西凡ソ二十町ニシテ鍛冶村神山村アリ地卑濕ニシテ水利ニ富ムヲ以テ村民多ク水田ヲ開ケリ鍛冶村ノ如キハ蓋シ龜田郡中豊富ニ位スルニテト云フ之ヲ過クハ則チ石川村ニシテ札幌街道ニ通スルノ捷徑ナリ南ハ凡ソ二十四町ニシテ湯川上下兩村アリ之ヲ鍛冶村ニ比ス

レハ人白稍多ト虫氏地味ノ劣下ナルヲ以テ農利饒ナラス半ハ鰯漢
ヲ以テ漸ク生活ヲ為スト云フ西北ハ敷村ヲ經テ七重村ニ出ル捷道アリ道程三
里許ナリ東ハ湯ノ澤ヲ過テ七里半許ニテ川汲村ニ到リ又行ク若干里
ニテ東海岸通檜込葦村ニ達スル街道アリ要スルニ寺野ノ地タル四
通八達行往ノ便運輸ノ利諸會所ニ冠絶シ而シテ獨リ少シク憾ナ
キ能ハサルハ蓋シ地勢爽嶮ニシテ水利乏シク海風或ハ猛ニシテ樹林
多カラサルノミ

境界

第一會所ノ地タル南北ニ長ク東西ニ隘ナリ北ハ鍛冶村牧場ヲ經
テ大中山ニ背キ東ハ曠野ヲ隔テ青森海峽ニ俯シ南ハ函館ニ對

シ西ハ則チ直ニ久根別大野諸村ヲ望ム墾地ヲ區画シテ三トス其最モ大
ナルモノハ陸軍射的場ヲ狹テ背面丘麓ヨリ起リ東南ニ走ル深堀ニ及テ
極ル地ハ皆幅員狹小ニシテ其西北丘麓ニ沿フモノナリ

幅員

明治十二年十月三十日開拓便函館支廳ヨリ拜借セル地積二十三万〇
七百六拾八坪ニテ又明治十三年五月一日下附ノ舊部令本地拾万
歩ヲ保セ會所管轄總地積三十三万零七百六拾八坪ナリ同年八
月ニ至ルニ比テ遂ニ拜借地ヲ改メテ下附地トセラルヘリ他陸軍射
的場ニ於テ秣時自餘ノ特許ヲ蒙リタル地所アリ其積九万九千九
百八十歩ナリ

地質

地質ハ年々犁鋤スルニ隨テ變化スルヲ以テ軽ク皮相ノ見ヲ下ス可ラス
 唯其大畧ヲ記シテ將ニ後日ヲ待タトス第一會所ノ地ハ高岱ニ位スルヲ以テ
 自ら乾燥ナリニシテ水澤ナキニシテ野火野火ハ土民ノ牧馬スルモノ翌年良草ヲ得レカ爲メ秋末ニ至テ原野ヲ燒クナリ之レカ爲メニ樹木生育スル能ハス故ニ水流モ亦隨テ涸渴スル者ナリ○按スルニ此地古昔ハ樹木生長セシマシ何トシハ巨大ノ朽木時ニ地ニ埋ル、モノアリナリ然レハ中世土民伐採シテ苗ヲ植エヌ尋テ原野ヲノ爲ニ涸渴シ未タ全地ヲ濕スニ燒クヲ以テ滿地充スルニ至リシモノナル可シ
 是ラス地層ハ蘆土ニシテ深キハ四尺淺キハ一尺ニ過キヌ其度一ナラス
 一タヒ之ヲ犁鋤スレハ輕鬆風ニ隨テ飛散スルヲ免レスト龜氏其下層
 ハ則ケ茶褐色礫土ニシテ少レク粘カアリ耕耘ノ久シキ上下混淆スルニ至
 ラハ化シテ上田トナスモ難キニ氷ラス及レマ古來膏ケ犁鋤セザルノ地ナルヲ

ヤ其膏腴言ハスレテ明ナリ

氣候

氣候ノ定度タル兩三年ノ經驗ヲ以テ容易ニ斷定シ得可キモノニ非ラズ必
 スマ數十年ノ經驗ヲ積ミザルヲ得ス然レモ今邊カニ之ヲ知ル可クザレハ
 則ケ姑ラク年々ノ經驗ヲ記シテ以テ數十年後ヲ待タトス吾第一
 會所ノ地ハ左右ニ海ヲ帶ヒ前後亦タ防風ニ應ヌ可キ山岳樹林ナキヲ
 以テ風勢常ニ強ク隨テ風害ヲ蒙ル或ハ多クシ雪ハ本年一月中旬
 ムリ堆積シ三月下旬ニ融解ス斯ノ如キハ近年稀レナリ而相ハ去年
 九月廿四日始メテ降レリ兩ハ連年殊ニ少ナク頗ル旱害ヲ蒙リ
 者ノ如ク極寒ハ華氏寒暖計七度ニ降り極暑ハ九十度ニ昇レリ則

千九百二十年九月氣候概表ヲ示ス

第一會所月々氣候概表

年號月日	寒暖計	晴	曇	雨	雪	風
明治三十一年九月	六十六度 五十三分三十秒	五日	二日	一日		西南風 五日 東北風 二日
十月	五十八度 五十分九秒	廿四日	三日	四日		西南風 六日 西北風 二日 東北風 二日 東南風 二日
十一月	五十三度 二十八分	十八日	八日	四日		西南風 九日 西北風 二日 東北風 九日 東南風 九日
十二月	四十九度 三十四分半秒	十三日	十一日	六日	一日	西南風 三日 西北風 五日 東北風 三日 東南風 三日
明治三十一年一月	三十六度 五十八分四秒	十八日	三日		九日	西南風 九日 西北風 一日 東北風 一日 東南風 一日
二月	三十七度 三十七分四秒	十八日	六日	羊月	四日	西南風 八日 西北風 一日 東北風 一日 東南風 一日
三月	四十九度 五十分九秒	十五日	九日	四日	三日	西南風 六日 西北風 四日 東北風 一日 東南風 一日

四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
五十三度 四十六分	六十一度 三十分五秒	六十四度 二十六分	七十三度 三十分三秒	八十二度 零分五秒	七十一度 四十八分	五十八度 五十分九秒	五十四度 二十四分	
十八日	十八日	十六日	廿一日	廿九日	十九日	廿一日	十五日	
六日	八日	七日	七日	一日	六日	九日	十日	
四日	四日	六日	三日	一日	五日	一日	四日	
一日							一日	
西南風 廿四日	西南風 二十日	西南風 十七日	西南風 十五日	西南風 十一日	西南風 九日	西南風 九日	西南風 九日	

但し表中寒暖計ハ正午ヲ取リ〇十二年九月ハ會所創立ノ月

七海道月進會誌

則チ廿三日ヨリ三十日ユテ八日間ノ平均表ナリ

水利

前條既ニ記セン如ク吾農場ハ高岱ニシテ水利ニ乏シク僅カニ無頭寺野蕨野ノ三小澤アリト虫氏皆細流ニシテ灌漑ニ供スルニ足ラス漸ク飲用ニ充ルノミ且ツ水脈深クシテ穿井頗ル困難ナリ本年五月試ミニ一井ヲ穿テシニ四丈ニシテ水少シク出ツ然レモ溜水ノ潛流セルヲニシテ虫ノ水脈ニ非ス唯ク東方會所ヲ距ル十町許リニシテ湯ノ澤アリ水流稍々大ニ凡地高低アルヲ以テ到底巨大ノ土工ヲ興スニ氷ヲ引スル能ハサルナリ

北海道開進會社第一會所第一出張所第一年報

地誌攬要

地方

吾北海道開進會社第一會所第一出張所ハ渡島國亀田郡軍川村ニ在リ北緯四十二度二分五十二秒東經零度四十分二十五秒ニ位ス西館港ヲ距ル七里半ノ東北ニアリ札幌官道七飯村ヲ距ル三里余程ニテ藤山村ヨリ右折シテ山路ニ入ル行ク一里半程ニシテ山頂ニ達ス又ニ里半程ヲ下レバ則チ軍川村ニ至ル其路險ナラス自在ニ牛馬ヲ通スシ該地ハ三面山ヲ繞ラシ一面ハ大沼ニ接ス東ハ茅部郡麻部村ニ接シ西ハ藤山村ニ接ス村ノ南方ニ吉野山アリ烏帽子山ハ七飯村ニ跨リ駒ヶ峰ハ高

ク天ニ沖シ大沼ヲ隔テ北方ニ位シ常ニ煙ヲ吐ク該峰ノ熾火ヤ今日ヨ
リ百年前ニアリ其勢猛烈ニシテ砂石ヲ飛レ積テ丘陵ヲ成ス即ケ吾輩場
一區ニ敷在ス丘陵ハ皆砂石ノ堆積セシテナリ次テ今日ヨリ二十六年
前再ヒ破シ砂石ヲ敷シ人馬為ニ死セリト云フ駒ヶ峰ノ麓ニ浴テ大沼小沼アリ大
沼ノ周圍ハ七里ニシテ小沼ハ峠下村頗ニ起リ軍川村ノ西北ニ至リ大沼
ト联接ス大沼ノ東北鉤子口ト稱スル所ヨリ川流トナル三里程ヲ經
テ麻部海ニ注ク則ケ麻部川是ナリ鯨鯢鱉等ヲ産ス麻部川留
野温泉ニ近ヅリ所ニ巨岩アリ鮭鱒ノ川ニ注ぐモノ是ニ至テ止ル留
野温泉ハ麻部川ニ傍ヒ留野橋ヲ距ル北七町我出張所ヲ距ル二
十七八町ニアリ

軍川村ノ實況

軍川村ハ山中ノ孤村ニシテ元茅部郡麻部村ニ屬ス其元始弘化
年間給州ヨリ林ハ江兵衛來住ス是レ移民ノ始ナリ其後南部ノ人
野沢竹松トナルモノ來航ス嘉永年間ニ至リ増殖シテ八戸トナル慶應
年中奥州相馬候相馬吉次郎幕府ノ命ヲ奉シテ開墾ノ業ヲ起シ該
村ヲ麻部村ヨリ分離セシメ高田郡軍川村トナシ村民ニ食米ヲ給シ
家具ヲ與ヘ勞作セシム然レハ中途ニシテ廢ヌ村中今ハ相馬邸
跡及ヒ相馬街道ノ存スルアリ現時ノ民家ハ三十八戸ニシテ各所
ニ敷在ス其人ロ二百十七人内男百十九人女九十八人ナリ宗教
ハ東西浄土新宗曹洞宗ナリ産業ハ採薪炭燒耕作牧馬木挽等

十リ該村の地質瘠薄ニテ農益薄キモ樹林ニ富ムヲ以テ採薪炭燠ヲ
 昂ノ冬間ニ函館ニ駄送シ新炭以テ米塩ニ易ク然レモ積雪七余ニ及
 テ行路絶一村落寒餓ノ色ヲ見スアリ該村ノ位置ヲ見ルニ家々各々數町
 ヲ隔ツ故ニ積雪ノ際隣家ニ至ルニモ最モ難シトス該村ノ周圍
 地互別ハ三十六町七段八畝余歩アリ明治十三年中ノ耕作收穫
 品ヲ左ニ列記シ以テ參考ノ一助ニ供セリトス

麥 三十五石

粳 二拾石五斗四合

蕎麥 四十五石

粟 拾五石

稗 八十石

大豆 四十八石

小豆 十二石

紅豆 壹石二斗

馬鈴薯 百二十四石六斗九升

耕作物中年々確タル收穫アリハ麥蕎麥稗大豆馬鈴薯ナリ就
 中馬鈴薯ハ其味佳美ニテ收穫ノ量他所ニ倍スト云フ牧馬ハ
 村民ニ利益ヲ與フニ最モ多シ故ニ貧家ト重テ猶五六頭ヲ有
 ス昨明治十三年調査ノ馬數ハ百九十頭ニシテ一戸平均五頭ヲ
 有ス村民共有牧場ハ村ノ東南及ヒ東北ニアリテ其互別大約

四五百町歩あり春夏秋ノ際ハ馬ヲ該場ニ放ツ吾社存ノ地ニ亦
 放牧地タリ水草ニ富ムヲ以テ村民ノ馬ヲ放牧スルニ十ノス毎年
 野草繁茂ノ際ニ至シハ竜田七重藤山峠下白山赤川ノ諸村ヨリ
 馬ヲ牽キ來テ放牧スルノモ多シ其牧畜ノ業ヲ興スニ適當ナル
 概ニ斯ノ如シ其他今ヨリ二十年前江戸ノ人貯付米牧牛場
 ヲ該地ニ開キタル時ハ未ク牧牛ノ利益薄キヲ以テ遂ニ廢止セリ
 ト云フ

境界

第一會所第一出張所ノ地タル之ニ仮線ヲ設ケテ三區ニ分タル第一區
 ハ軍川村ノ西北ニ位シ東ハ軍川村ヨリ鹿部村ニ通スル道路ヲ以テ七重

勸業試驗場所屬地及ヒ第二區ニ連リ西ハ大沼及ヒ鹿部川ヲ界トシ
 シ南ハ村民所有地ニ接シ北ハ猪進川ヲ隔テ五ヶ村共有牧場及ヒ健全
 社借用地ト相對ス第二區ハ東南ハ山ニ據テ官林ヲ以テ界トシ西北ハ鹿
 部街道ヲ以テ第一區ニ連リ南ハ中ノ澤ヲ隔テ村民共有牧場ト相對シ
 北ハ大七澤ヲ以テ七重試驗場屬地ニ相接ス第三區ハ軍川村ノ西南
 ニ位シ東北ハ村民ノ所有地ト接シ西ハ小沼ニ臨シ南ハ吉野山麓ニ至ル

幅員

明治十四年六月七日軍川村ノ北部大約六十万歩
 西南三十万歩ヲ開拓便ヨリ下附セラレタレ未ク精密ノ測定ヲ經サル
 ヲ以テ其互別ヲ確知スル能ハス故ニ後日實測ヲ俟テ詳記スシ

地質

地質ノ鑑定ハ化學ニ據ラサレハ明言ス能ハス然レトモ地層ノ状態
 植物生育ノ模様及ニ村老ノ実験トニ據リ聊カ其概要ヲ記スルヲ得
 シ第一區ハ丘陵各所ニ起伏シ凸凹參差尤モ平坦ノ地ニ乏シ故ニ開墾ニ
 不便ナリ其平坦ナル處ハ大約卑濕ノ地ニシテ水利ニ便アリ以テ水田ヲ起スレ
 其地質ヲ檢スルニ上層ハ黑色ノ埤土ニシテ植物ノ敗化セシモノナリ其厚サ
 ハ三四寸ヨリ五六寸ニ至ル卑濕ノ地ハ高燥ノ地ニ比スレハ埤土ノ層厚シテ下層即チ
 心土ハ火山ヨリ噴出セシ帶赤褐色ノ焦砂ニシテ往々礫石ヲ混ス上層ハ植
 物ノ敗化セシモノナリ作物ノ生長ニ緊要欠ク可カラサル土質ナリ即チ其黑色
 ナルハ炭素質ノ多量ヲ含高スル確証ニシテ尤モ有機分ニ富ムヲ推考スル

ニ足ル下層ハ唯無後質ヨリ成五セシ砂礫タルヨリ作物ノ生育ヲ助クル能
ハサレノナラス却テ害アルモノトス是レ我々張所ノ天不幸ト謂フシ然レ尼
之ヲ耕鋤ニ年々作物収取シ去ル所ノ養分即チ有機分ヲ補給シ上層ノ
埤土ニシテ常ニ耕作物ノ養分ニ欠乏セシメサレハ永ク肥沃ノ土タラズキモ
若シ補給ヲ怠リ忽テ附スル時ハ埤土中ニ含有スル有機分忽チ消耗シ
去リ隨テ下層ノ焦砂露出セバ又耕作スルニ能ハサレニ至ラズト思フ用
ヒサレ可ケヤ村民ノ説ク所ニ據レハ新ニ開墾シテ三四年間ハ肥料ヲ施サス
シテ作物ヲ收納スルヲ得キモ五六年ヲ経レハ忽チ瘠地ニ変ニ又作物生長
スル能ス故ニ耕作四五年ニ及ビ荒蕪ニ至ル地所ヲ撰シテ新ニ又開墾
ス之ニ依テ村民ノ地積ヲ要スル地ニ比スレハ廣大ナリ以テ其上層ノ埤土ハ有

地積開墾會社

機分ヲ多量ニ含有スルヨリ肥沃ニシテ作物生長ニ適シ其下層ノ焦砂
ハ瘠瘠ニシテ作物生長ニ害アルヲ確知スルニ足ル第二區ハ山麓タルヨリ地勢
西方即チ第一區ニ向テ傾斜ス高燥ニシテ野草繁茂ス然レニ第一區ニ比スレ
ハ上層ノ埤土薄クシテ耕作ニ適セス唯牛馬ヲ牧シ飼草ヲ収獲スルニ適ス
ルノミ第三區ハ前述ノ二區ニ較フレハ埤土厚クシテ焦砂少ナリ地味稍々肥沃
ナルヲ覺ユ然レニ半ハ山岡ニシテ半ハ湿地タリ尤モ水利ニ富ムヲ以テ水田ヲ起
スニ可ナリ

氣候

氣候ノ定度ハ僅々一二月ノ經驗ヲ以テ容易ニ判定シ難ク必ス
多クノ歲月ヲ経テ確定スレシ然レニ吾々出張所ハ開創以來日尚淺

北海道開墾會社

夕未夕四旬ニ満タズ今左ニ氣候表ヲ掲ク

第一會所第一出張所氣候表

明治十四年

同 十二日	同 十一日	同 十日	同 九日	同 八日	同 七日	六月 六日	月 日
六十五度	六十八度	六十九度	六十六度	七十度	六十三度	六十五度	寒 暖 計
			晴	半 晴			晴
	曇	曇			曇	曇	曇
雨							雨
							風

同 十三日	同 十四日	同 十五日	同 十六日	同 十七日	同 十八日	同 十九日	同 二十日	同 二十一日	同 二十二日
六十八度	六十四度	六十八度	六十七度	六十五度	七十二度	七十三度	六十四度	五十五度	六十一度
晴		半 晴	晴		晴	晴	晴		半 晴
	雨			雨				雨	

北海通開港會社

北海通開港會社

同 三十三日	六十度			雨	東南風
同 二十四日	六十二度			雨	東南風
同 二十五日	六十五度		曇		
同 二十六日	六十三度			雨	
同 二十七日	六十度				東南風
同 二十八日	七十四度				
同 二十九日	六十三度				
同 三十日	六十四度				
七月一日	六十度			雨	
同 二日	七十度				東南微風

北海道開道會社

同 三日	六十五度		曇		
同 四日	六十度		曇		西風
同 五日	六十五度		曇		
同 六日	六十二度		曇		
同 七日	六十一度			半晴	東風

水利

吾農場ハ甚タ水利ニ便ナリ第一區ハ大七川中ノ澤溪流アリテ共ニ
 田圃ニ澆クヲ得ニ第三區ハ武佐川其中央ノ南ヨリ北ニ向テ母溪流ル
 ニヨリ最モ水利ヲ得タル所ナリ唯第二區ハ地勢高岱ナニヨリ水利ニ乏レ
 然レモ南ニ中ノ澤アリ北ニ大七川アリ共ニ溪間ノ清流ニシテ飲水ニ供

北海道開道會社

ス可シ

森林

第一區ノ東北精進川及鉦子口ニ沿ヒ密林鬱蒼其數大約三万本リ
第三區ハ小沼ニ沿テ亦樹林ニ富シ其數大約二万本ヲ得シ木材ハ山毛
榉、桂、檜、檜、胡桃、槐、楡、槭等ナリ

北海道開進會社本局

北海道開進會社第二會所地誌攬要

地方

吾開進會社第二會所ハ渡嶋國甬志郡乙部村ヨリ東距一
里ニ在リ北緯四十一度五十六分三十四秒東經〇度二十秒ニ
位ス西南檜山郡江刺港ヲ距ルテ四里東南函館港ヲ
隔ルテ二十一里南ハ則チ若干里ニシテ同國檜山郡ニ隣リ北
ハ則チ若干里ニシテ後志國久遠郡ニ接ス

境界

農場幅員ハ東南北方三面皆山ヲ以テ掩フ唯西方一帯
宏濶海ニ接スルノミ然レモ其間又自ラ樵路牧徑ノ存

北海道開進會社本局

スルアリ今細ク之ヲ繹スレハ西ハ乙部五厘澤諸村ヲ經テ
字追分ニ出ツ是ヨリ途岐シテニトナレハ則チ直ニ榊崎泊
諸村ヲ過キテ江刺港ニ達ス其間途道僅ニ凸坳ヲ帶フ一
ハ則チ折テ東ニ安野呂川ヲ渡リ城虫村ニ達ス道程
凡ソ三里半是レ函館行路ノ本道ナリ東南ハ字船越
ト稱スル小山嶺ヲ踰ハ賊川村ニ出ツ再ヒ一峻山嶺ヲ越ハ遂ニ小
黒部村ヲ經テ坦路城虫村ニ接ス是レ函館行路ノ捷道ナ
リ之レヲ本道ニ比スレハ近キヲハ里許然レハ道ヲ此ニ取レ崎嶇狹隘頗
艱險ニ苦ム西北ハ後志國又遠郡小茂内村ニ達スル道アリ
東北一帯ハ則チ所謂樵路牧經アリト虽ニ未タ之ヲ詳ニセズ

要スルニ吾農場ト痛痒甚ク関涉セサル者ノミ且近郷
村落ノ如キハ復ク繕正スヘキナレ獨リ乙部村ハ學校アリ江
刺病院出張所アリ戸數モ亦ニ百三十二戸アリ吾會所ニ
於ル隨テ幾分ノ利便ヲ興フト云フ若シ夫レ江刺ハ則チ人烟
二千戸百貨稍々是レ是レ衆ノ知ル所ナリ并テ此ニ付見ス

幅員

農場幅員ハ自ラ之レヲ五ニ別ツ其東會所ト接スル者
之レヲ小坂下ト云フ地積六町八反一畝十步七二其西北
小坂下ニ隣ル者之レヲ大谷地ト云フ地積四拾三町七反
四畝廿七步八一而シテ東大谷地ニ隣ル者之レヲ小千代野ト云フ

地積五町七反六畝六步三七而シテ北又小千代ニ隣ル者之
 レヲ千代野ト云フ地積百十二町九反九畝〇八步而シテ
 其ノ千代野ヨリシテ東南十レ者之レヲ大川端ト云フ地積
 四拾八町〇ニ畝十六步而シテ又ニ部川ヲ隔テ南千代野
 ニ隣ル者之ヲ竹森野ト云フ地積九リ百十六町六反六畝
 六步通計三百三十四所〇〇畝拾五步蓋シ全地其始メ
 ハ則チ滿面蒼茫トシテ原野ニ過キス然レモ其間或ハ細
 流ヲ以テ境シ或ハ森林ヲ以テ画シ或ハ高低ノ自ラ區域ヲ
 別ツアリ隨テ名稱モ亦異ナリ而シテ其森林ノ特ニ大
 ナル者ハ千代野ヨリ北距里許リ赤川ト稱スル處ヲ以テ

冠絶トナスト云フ故テ茲ニ付見ヌ

地味

幅員欄中既ニ縹速セレカ如ク吾農場ハ自然ニ區域ヲ
 別リ其大谷地ト稱スル者ハ滿面皆谷地ナリ
方俗之レヲ
谷地ト謂フ然レモ又尋常谷地ト雖ヲ異ニシ山間ヨリ細流涓
上地泥濘滿面
瀆水洩出スル者
 出遂ニ一團沃土ニ淹溜スル者ナリ故ヲ以テ此地大ニ水田
 ニ適ス其千代野小千代野竹林野ト稱スル者ハ地少ク
 茶褐色ヲ帯ヒ其小坂下大川端ト稱スル者ハ地少ク鼠色
 ヲ帯フ而シ大川端特ニ肥沃ヲ以テ聞ユ之レヲ要スルニ各
 地其土ヲ摘シ之レヲ撚察スルニ輕鬆ナラス膠黏ナラス蓋シ

北海通開建會上本局

能ク田圃ニ適スル者ト若シ夫レ地質ヲ分析シ細カニ其肥
瘠ヲ鑑定スルハ則チ邊ニ之ヲ辨シ難シ請フ異日ヲ待シ

水利

吾農場ノ東南兩方ヲ貫截シ兩走一里遂ニ海ニ朝
宗スル者之ヲ乙部川ト稱シ其南乙部川ニ沿テ一帯ノ
細流アリ會所對岸ニ至リ遂ニ乙部川ニ合ヌ之レハ小川
ト稱ス乙部川ハ幅ニ十間或ハ三十間ニ至ル水極テ清
冽ナリ或ハ云フ春夏ノ交小舟ニ乘リ溯リテ會所前岸
ニ至ル可シ是ヨリ上ハ川身狹隘巨石突兀復タ舟
楫ヲ通ス可ラスト或ハ云フ乙部河口尚且入船スヘカラス

況ヤ里餘ノ上游ヲマト未タ其孰カ是ナルテ知ラス姑ラク書
レテ異日ヲ俟ツ且ツ其ノ水源ノ如キハ未タ之レヲ詳ニセス蓋
シ數多ノ細流ヲ合シテ然ル者ナリ小川ハ則チ小川村ヨリ
竹林野ニ沿テ出ル一細流ノシ之レヲ要スルニ二川皆十
霖雨累日ト雖モ未タ水害ノ甚シキヲ見ス却テ利用ノ
大ナルヲ覺ユ但飲水ノ如キハ則チ井水ノ存スル有リ

氣候

會所創立以降日尚淺ク風雨寒暖ノ候ニ至テハ尽ク
之レヲ周年ニ檢スル能ハス今姑ク本年五月ヨリ十月ニ
至ル比例ヲ奉ケ其一月中ニ就キ以テ之レヲ調査スレハ

則チ右表ノ如クナニ然レモ是レヲ惟其ノ一斑ニ過キス若シ
夫レ全豹ハ則チ異日ヲ俟テ更ニ之レヲ収載セシ

月次	氣候		晴	雨	曇	風	雪
	寒暖計正午	一月中平均度					
五月 <small>自九日至廿五日 日数十三日間</small>	六十一度	十八日	三日半	一日半	西風十八日 東風四日	〇	
六月	六十六度半	十八日半	七日半	四日	西風十七日 東風十三日	〇	
七月	七十九度七分二秒	二十一日半	四日半	五日	西風三日	〇	
八月	八十四度四分五秒	二十七日	四日	〇		〇	
九月	六十五度七分	十六日	九日	五日		〇	
十月	五十七度三分六秒	二十五日	三日	一日		二日	
十一月 <small>自一日至廿五日 日数廿五日間</small>	五十二度五分五秒	十四日半	八日	一日		一日半	

北海道開進會社第三會所第一年報地誌攬要

地方

吾北海道開進會社第三會所ハ膽振國山越郡長万部村近
御字文別ニ在リ室蘭灣ノ極處ニシテ東經一度三十八分
北緯四十二度三十四分ニ位シ南函館港ヲ距ル一十七
里許リ北後志國壽都郡中津村ヲ距ル一十一里許リナリ
而會所接近ノ方位ヲ陳シハ西ハ二里ヲ隔テ訓維トナリ
又二里ヲ距テ黒岩トナリ東ハ一里ヲ距リテ長万部村ト
ナリ北ハ則礼文葦ノ峻嶮ヲ帶ヒ山脉綿互ナリ南ハ則チ海
ニ面シ遙ニ有珠駒ヶ嶽ヲ左右ニ望ム此レ我第三會所地

方ノ梗概ナリ

幅員

我第三會所墾地ノ位置ヲ陳シト文別川ヲ中央ニ左右ニ農場ヲ別ケテ一境區ヲナス其川西ニアハル者ヲ西文別ト稱シ地積凡ハ万四千二百三十四步其川東ニ在ル者ヲ東文別ト稱シ地積凡ニ十一万六千の九十四步其東文別ヨリシテ東北凡十町ヲ距ル者ヲ雁皮野ト稱シ地積凡八万九千二百九十五步其雁皮野ヨリシテ東南凡五町ヲ距ル者ヲ中山ト稱シ地積凡十萬七千八百步其中山ヨリシテ東北凡五町ヲ距ル者ヲ山下ト稱シ地積凡一萬八千五百の五步其山下ヨリシテ北凡二十町ヲ距ル者ヲ栗

木岱ト稱シ地積凡十八万四千三百十二步ナリ又其文別ヨリシテ西二里ヲ距ルモノヲ訓縫ト稱シ地積凡十四万八千七百四十七步其訓縫ヨリシテ西凡二十町ヲ距ル者ヲ茂訓縫ト稱シ地積凡六万七千四百二十四步通計百壹万六千四百一十一歩ナリ是皆第三會所墾地接續ノ梗概ナリ

地味

昔第三會所ノ地味タル古昔洪水ノ為メ木葉塵埃揚上シ自然ニ堆積シテ一面ノ沃土トナル者ナリ故ニ今其ノ周有ノ地質ヲ檢スル之ヲ地下二尺以下ニ於テセサルヲ得

又何ヲ以テ之ヲ知ル今該海濱處々ニ凹低シ山ヨリ海ニ
 立リ以テ川様ヲナス者數多アリ蓋シ是レ處々ニ川流ア
 リシ者ニテ常ニ漲溢シテ塵埃ヲ推揚セシテ然ルニ
 今ニ至リ遂ニ合シテ一ノ文別川トナリ是ヨリ海ニ朝セ
 シ者ナリ而メ其固有ノ地味ハ鼠色ニシテ僅ニ粘カラ帯
 フ夫レ地ノ肥沃是ノ如シ是ヲ以テ百草尽ク蔓延繁茂シ
 就中虎状ノ如キハ其根盤桓殆ト樹根ノ如シ且文別川
 ハ時トシテ或ハ漲溢ノ勢アリト云レ今ニ至リ未タ植物
 ラ傷害スル如キノ甚シキヲ觀スト云フ

氣候

氣候ハ農場ニ關係スル甚大ニシテ特ニ之ヲ詳悉セザル
 可カラズ今吾農場ノ氣候ヲ檢スル左ノ略表ヲ以テスト
 雖先ツ風位ノ一端ニ就テ縷述スレハ春夏ノ交ハ東風
 所謂山嵐ナル者多ク秋冬ニ至リテハ西風特ニ多シ然レ
 此此地室蘭灣ノ中央ニ位シ灣ノ最極ナリ故ニ近御長万
 部村ノ如キニ比スレハ風勢甚タ猛ナラス且背面山峦綿
 互起伏スルヲ以テ秋冬ノ際ト雖比又幾分ノ障屏トナリ
 其甚シキニ至ラス猶尤表ニ就テ檢スレト云フ

月次	氣候	寒暖計正午一月間平均度數	晴	雨	曇	風
四月 <small>自廿三日至廿一日</small>	晴	五十一度廿分	五日	三日	〇	東南 六回 東北 一回

北海道開港會社事務局

吾農場ノ水利ニ於ル至便ト謂フ可シ川ニ文別訓縫ノ二

水利

五月	日數	五十四度	二十日半	六日半	四日	東三回 西五回 南四回
六月	日數	六十九度	二十日	七日	三日	東四回 西一回 南一回

川アリ池ニ三ノ蓴菜沼アリ今之ヲ縷述スレハ文別ハ幅最狹隘ナル處二十間其最廣闊ナル處六十間水平常十レハ則チ川身十間ニ過キス餘ハ大抵白沙呈露路ニ若シ或ハ霖雨累日大ニ漲溢スレハ則チ滿川皆水ナリ漁ニ鹹海老諸種アリ訓縫川ハ幅凡十五間水色青錠ノ如ク常ニ能ク満盈ス漁ニ鮭鱒諸種アリ而ノ水中ハ大抵白沙ナリ然レモ未タ二川ノ源流ヲ探討セス要スルニ數多細流ヲ合シテ然ル者ナリ池一ハ墾地中山ニアリ長凡ソ百五十間幅凡三十間周圍凡ソ三百六十間一ハ墾地訓縫ノ傍側ニ在リ長凡四十間餘幅凡八間餘周圍凡ソ

百間餘一ハ鑿地訓縫ト茂訓縫トノ間ニアリ長凡四十間
幅凡八間周圍凡百間ナリ三池皆蕒菜叢生ス故ニ
蕒菜沼ト稱ス花候ニ至ルニ比シテ白片點綴一莖雪
ノ如シ常ニ鷗鳥鷺鷥ノ水上ニ浮スルアリ幽致清
雅ノ趣掬ス可シ蕒菜沼ノ名洵ニ誣ヘサルナリ水利
ノ便既ニ已ニ此ノ如シ若シ地味ヲ撰ンテ水田ヲ開墾ス
レハ或ハ大ニ適合セン是ヲ以テ明年試ニ之ヲ開墾ス
ルノ豫圖ナリ

運輸

文別ノ湾タル海面凡ソ二十町許リ淺瀬ニシテ白沙平

舗ス故ニ此ニ入船スル或ハ難シ蓋シ西風ノ時ハ則ケ風
位ト正ニ相對スルヲ以テ尤モ入船スヘカラス又東風
甚タ猛ナルト却テ船ヲシテ暗砂上ニ衝揚マシムルノ
憂アリ然レモ春夏ノ交東風駑蕩ノ時ハ則ケ徐々航
進遊ニ停泊スルヲ得ヘシ且秋冬ノ時ト難モ是地ヲ
距ルヲ西四里許リ黒岩驛ニ於テスレハ則ケ時トシテ滞
泊數日ヲ經過スヘシ頃日三菱會社汽船ノ此ニ停泊スル
ヲ觀テ見ル可シ夫レ是ノ若ク運輸ノ一端ニ至リテハ
之ヲ至便ト謂フ可ラス然レモ之ヲ便ニスル蓋シ道アリ
何リマ九リ目下會所ニ用ユル貨物ノ如キ一ニ之ヲ函

館ニ仰カサルハナシ是ヲ以テ巨額ノ出費ヲ要シ而メ
其貨物ニ至リテハ尽ク之ヲ良美ト謂フ可ラス寧ロ
之ヲ壽都潮路地ヲ購求スルハ便且優レルトナルニ
若カス何ソヤ且ツ未嘗ニ就テ之ヲ言ヒ蓋シ文別ヨリ
壽都ニ至ル十一里潮路ニ至ル九ソ八里ナリ客歳新道開
鑿ノ功成リ殆レト馬車ヲ以テ往及セトスルノ費アリ
但其中央黒松内驛ニ至ルノ間九一里許緩或ハ急ナル
坂路アルノミ因テ今之ヲ駄送ニ來シル一苞ニ運送費
九四十錢ヲ要ス之ヲ函館ニ於テスル一月ニ拾錢乃至
五十錢ヲ要セサルヲ得ス蓋シ壽都潮路ハ艱業盛大

ナル地ニシテ物産輸出スル亦隨テ大ナリ客年七月ヨリ十
月ニ至ルノ間諸船ノ該灣ニ航スルモノ未嘗増テ載テ
來リ之ヲ騰キテ換フルニ漁物ヲ以テス故ニ之ヲ購求スル
却テ函館小樽ノ如キヨリ森ナリ則チ其利不便否燭照
毫トノ如シト謂フヘシ且収獲物ヲ運搬セシト欲スレハ
一小風帆船ヲ備具シ間ヲ計リテ森駅ニ運搬シ又便
船ヲ待テ遂ニ函館ニ運搬スレハ蓋シ又甚シキ不便ヲ
見スト云フ是レ則チ之ヲ便ニスルノ道ナリ

北海道開進會社第四會所第一年報

地誌攬要

地方

吾北海道開進會社第四會所ハ後志國岩内郡初足村南
 距堀株川北涯ニアリ北緯四十三度五分二十七秒東經零
 度三十四分三十秒ニ位ス西南岩内郡役所ヲ距ル
 二里八町東方一帶木梨稻穂岩内諸峯壁立シ稻穂
 山ヲ踰テ遂ニ余市郡ニ接ス南ニ三里ヲ距リテ雷
 電ノ峻嶺巍然トシテ屹立シ山脉左ニ分レテ綿亘起
 伏之ニ朝スル者ノ如シ西北ハ則チ芽沼村ノ岬角ヨリ

古宇郡ノ海濱ニ突出シテ遂ニ岩舟ノ一港灣ヲナス
之ヲ要スルニ吾農場ハ西方一帯宏闊海ニ臨ミ南東北
ノ三面衆山壁立シ嶮巖崔嵬屏風ノ如ク又藩籬ノ如
ク而メ中ニ廣袤三方里又餘ノ曠野ヲ有スル者ナリ
今四方往及ノ街路ヲ縹述スルハ其岩舟駅中ヨリシテ東ニ
迂回シテ走ル者之ヲ余亦山道ト謂ヒ其南ニ迂回シテ走
ル者之ヲ硫黃山道ト謂フ又雷電山ヨリ走リ來リ終テ
岩舟驛ヲ貫穿シテ堀株川ヲ越ヘササキ札内カヤ某泊ト泊リ孟キ眞ラ舟
ノ諸村ヲ經テ遂ニ古宇駅ニ達スル者アリ是レ西海岸
ノ本道ナリ蓋シ泊村ヨリ以北ハ道途險隘時ニ或ハ往及

ヲ絶ツノ患アリト云フ余市山道ハ九十二里ニシテ余
市驛ニ達スルノ官道ナリ硫黃山道ハ九五里ニシテ
硫黃場ニ至ルノ細道ナリ他樵路牧徑數多アリト雖
氏今一々之ヲ歴奉セス夫レ四方街路ノ景况大抵比ノ
若シ則チ吾農場ノ行往及還ニ於ル亦之ヲ至便ト
謂フ可シ而メ岩舟ノ駅タル西海岸ニ在リテハ特ニ
小樽港ニ亞クノ要處ニシテ人烟稠密渙業富澤
人多ク望ヲ後來ニ屬スト云フ然ラハ則チ吾市四會
所ノ地タル蓋シ鉦中ノ鉦々タル者ナリ謂フ可シ今左ニ
岩舟駅ノ概況ヲ奉ケ其虛譽ニ非ケルヲ證レ并テ吾

第四會所ノ利便ナルヲ證スト云フ

戸數三百八十九

寺觀五

郡役所一

小學校一

札幌病院出張所一

開拓便刑法出張所一

船改所一

駅迄所一

四等郵便局一

町數八

合千五百三十二人

寄留千三百九十九人

以上本年五月調査ニ係ル

幅員

吾壑地幅員ハ堀株川ヲ南北ニ別ツテ一區域ヲナス今假
リニ之ヲ大別シテニトナシ又之ヲ細別シテ十一トナス
其川南ニアル者ヲ甲部ト稱シ其川北ニアル者ヲ乙
部ト稱ス乙部ヲ別ツテニトナス其會所々在ノ處ヲ

第一號ト稱シ地積大凡四拾萬步其第一號ヨリ
シテ「リヤムナイ」川ヲ過テ東スル者之ヲ第二號ト稱
シ地積大凡百七拾五萬步又甲号ヲ別ツテ九トナス其
會所ヨリシテ堀株川ヲ越ヘテ西スル者之ヲ第九號
ト稱シ地積大凡十五萬步其第九號ヨリシテ直ニ
東南ニ隣ル者之ヲ第八号ト稱シ地積大凡五十五
萬步其第八號ヨリシテ堤障ヲ跨ヘテ東ニ接スル
者之ヲ第七號ト稱シ地積大凡三十拾萬步其第七号
ヨリシテ余市山道ヲ中央ニシテ又東ニ比駈スル者之ヲ
第六號ト稱シ地積大凡拾七萬步其第六號ヨリシ

テ直ニ東北ニ走ル者之ヲ第五郷ト稱シ地積大凡三
 十八万歩其第五号ヨリシテ南ニ縣ナル者之ヲ第
 四号ト稱シ地積大凡二十拾五万歩而其第四号ヨリ
 シテ西スル者之ヲ第三号ト稱シ地積大凡十三万歩而
 ノ其第三号ヨリシテ東スル者之ヲ第二号ト稱シ地
 積大凡二十拾五万歩又其第二号ヨリシテ南僅ニ相距
 リテ比縣スル者之ヲ第一号ト稱シ地積大凡拾七万
 歩通計大凡四百五拾万歩ナリ蓋シ此ノ如ク相聯絡シ
 遂ニ大曠野ヲナシ而テ今樹林ノ位置ヲ速レハ西
 南ニ密ナラスメ東北ニ密ナリ故ニ之ヲ周犁スル或ハ

雖シト雖モ伐採以テ薪材ニ充ツル如キハ則チ其益タル
 少小ニ非ラサルナリ且我會所々在ノ地タル水運ニ便ニ
 シテ防風ノ障ヲ備ヘ又四外ノ諸小村落ニ至ル極メテ
 便且近ナリ意フニ是日炊烟万户植物穰々滿際ノ
 曠野変シテ熟圃佳田トナラハ則チ其景象果ノ何
 如リヤ

地味

地質ヲ辨明スル化學ノ實驗ト植物發育ノ状態トニ
 據テ以テ之ヲ定ムルキナリ今然ラスメ之ヲ辨明スル蓋
 シ皮相ノ見ニシテ之ヲ確案ト謂フ可ラス然レモ經驗ノ

皮相ノ具或ハ以テ其梗概ヲ知ルニ足ル者アラス蓋シモ
第四會所ニ就テ之ヲ論スルニ部第一號ハ平坦開闢ニシ
中央ニ丘阜アリ而シテ丘阜ノ土ハ黒色ニシテ輕鬆々ク砂
分ヲ含ミ又僅ニ粘氣ヲ帶フ而シテ地下三尺以下ハ石塊稀
ニシテ塩氣ヲ含ムヲ覺ユ是レ會所家屋所在ノ地ナリ而
シテ丘阜ヨリテ西北ハ茅葦繁生水分ヲ含ムヲ覺ユ所謂
氾地ノ徵アリ其土ハ黒ニシテ又砂分ヲ含ム是レ純
ノ細礫土中ニ混入スルヲ以テ極メテ輕鬆ナリト雖モ
圃ト爲ルニ隨テ縮ムヲ備クシ又其丘阜ヨリシテ
東南即チ堀株川北涯ハ茅葦滿眸純然ハ氾地ナリ頗ル

水田ニ適スルヲ覺ユ其土ハ泥濘其色ハ淡黒其質ハ
膠粘ナリ而シテ其丘阜ヨリテ東ハ箬筍繁茂シ其土ハ
柔順其色ハ淡黒僅ニ粘氣ヲ帶ヒ頗ル滋養分ヲ含
スルヲ覺ユ第二號ハ雜樹繁茂シ其土ハ縮其色ハ淡
ニシテ黄土中六尺已下尙同質ナリ或ハ氾地ノ徵アリ
トモトモ一小部分ニ過キス而シテ養分多量蓋シ兩部等
一等ノ土ナリ開ク「リヤムナイ」村農家年々諸種ヲ播
種スル適サレナク就中藍ヲ以テ第一トナスト然レ
氏獨リ惜ム樹林蒼羽鬱鬱聳金頗ル困難ナルヲ又甲
部第一號ハ僅ニ斜高ヲ帶ヒ稍丘状ヲナス雜草茂郊

樹林アルナシ其土ハ脆鬆其色ハ淡黒少ク砂分ヲ含ム其
固有ノ土ハ地中尺下ニアリ其色ハ黄黒ニシテ其氣ハ粘巖
雜草ト同シク繁生ス翻シテ熟圃トナサハ上下混和
シテ良土トナルヘシ第一号ハ稍山様ヲナシ下ニ野東ノ沢ヲ望
ム地垣又凸タリ右疏黄山道ニ沿テ僅ニ上レハ其土ハ淡黒
雜草矮小滋養分ニ乏シク漸ク東スルニ比レテ変シテ膏
腴ト爲リ其色ハ淡黒其質ハ縮軟而シテ樹木箬笠亦隨
繁生ス第三号ハ凹状ヲナシ其土ハ粘靱其色ハ淡黒雜草
繁生ス蓋シ中等ノ土ナリ第四号ハ稍東北ニ傾斜シ其
土ハ縮其色ハ黒ニシテ黃雜草頗ル繁生シ滋養分多シ

第五号ハ輸炭道ニ沿フテ垣タリ凸タリ其質一ナラス或
ハ第四号ニ類シ或ハ第二号ニ類ス且肥且瘠往々石塊
アル免レス第六号ハ大抵第五号ニ類ス然レモ余市
山道ノ北ニ位スルヲ以テ頗ル衆ノ眺望スル所トナル第七
号ハ岩舟市街ニ背キ北方へ突出シテ三角様ヲナス其
土ハ膏腴ニシテ雜草繁生ス其色ハ淡黒少ク砂分ヲ含
ムトモ能ク縮カラ保ツ防風ニ注意スルハ佳圃トナルヘ
シ但マ、矮小柏樹アルヲ免レス第八号ハ海濱ニ面シマ、
小丘ヲナス其土ハ砂分多ク其色ハ淡黒其質ハ脆鬆
雜草繁生桑樹多シ大小麦根菜ヲ栽ルニ適セリ地垣

ニレテ運輸便ナリ位置ヲ論スレハ恐ラクハ是地ノ右ニ出
ル者ナレ第凡号ハ大抵第八号ニ類ス蓋シ土中往カ砂
分ヲ含有スル者ハ獨リ岩内地方ニ止ラヌ西海岸中現
ニ田圃トナル者多ク然リ然レモ百物皆能ク成育充
達ス抑砂分ナル者ハ世ニ稀ナル白河ナル者ト異ニシ
テ一種ノ土質ナルカ若シ夫レ之ヲ絲々繕修スルハ則ケ異
日ヲ待シ

水利

凡リ農場ヲ撫ハ最モ水利ニアリ蓋シ吾農場ノ水利
ニ於レ之ヲ便且利ト謂フモ亦過言ニアラザルナリ今海

運ノ便否ヲ説明スレハ磯谷郡ヨリ岩内駅ニ達スルハ通
船方俗所謂「サレバ」船ナル者且暮往來源々絶ハス冬期
ト至レ波平ニ風順ナレハ亦通航セザレハ十分僅ニ四時間
餘ニレテ乃チ達ス謂フ可シ復雷電ノ嶮且艱ナルヲ知
ラスト又岩内駅ヨリ小樽ニ通航スル大抵月次兩回ヲ
以テ而ノ該驛ヨリ舟行我農場ニ達セシト欲スレハ海
ニ浴フテ凡ニ二里程ヲ北ニ下レハ則チ堀株川ニ達ス而ノ
又川ニ浴フテ溯ルハ二十町許リニシテ遂ニ我會所對岸
四五町許リノ地ニ達ス乃チ之ヲ便且利ト謂ハザレテ得
ス柳堰株川郡中第一ノ雄川ニシテ稻穂山中ニ臨觴

来リ「ホロ井」「カモイ」「中ノ川」「ソッコナイ」「リマムナイ」ノ諸
川合流シテ堀株村ニ達シ而シテ又左旋右回シテ海面ニ
注ク故ヲ以テ炎夏ノ候ト龜尾復洞湯スルノ患ナレ尙シ
川豚ニ浴フテ水田ヲ開設スシト終ニ數十万石ヲ収入ス
ルノ域ニ至ル復難ヲサレハ且圃ヲ木村ヲ伐採以テ流
シ来ルニ四時ヲ控ハスト龜尾春季融雪ノ時ノ如キハ遠ニ
福徳山禁ヨリ九里程ヲ疏通シ来ルハレト川ハ緩流迂
回ニシテ水青錠ノ如ク魚ニ鮭鱒鯰諸種アリ而シテ衝溢
ノ患甚メテ稀少ナリト云フ

